

■医療講演会 (2012. 7. 22)



平成24年度 医療講演会
**ES, iPS 細胞を用いた
パーキンソン病治療**

7/22 (日) 13:30~15:30
(13:10開場予定)

ひと・まち交流館 京都 大会講室

(河原町五条下がる東側)

講師 **高橋 淳 先生**

京都大学再生医科学研究所/
iPS 細胞研究所(兼任)、准教授



パーキンソン病に対しては1980年代の終わりから欧米で胎児中脳黒質細胞の移植が行われており一定の効果が見られていますが、移植される細胞の量や質に問題があり広く普及するには至っていません。そこでES細胞やiPS細胞を用いた移植治療に期待が寄せられています。我々はヒトES、iPS細胞からドーパミン神経細胞を誘導し、重長型モデルへの移植で効果や安全性を検証しています。この講演では、これらの研究の現状と今後の展望について紹介します。

2011年9月、厚生労働省と文部科学省が協働で実施する「再生医療の実現化(ハイウェイ)プロジェクト」で京都大学 iPS 研究所の高橋淳准教授が研究課題とする「パーキンソン病に対する幹細胞移植治療の実現化」が採択されています

費用: お一人1,000円(但し患者様のお付き添いお一人は無料です)

どなたでもご参加いただけますが、お申し込みが必要です
お申込の詳細は裏面をご覧ください

お申し込み期日 6/25~7/14 (定員230名に達しましたら締め切りの予定ですご了承ください)

<お問い合わせ>
京都府難病相談・支援センター (075)461-5148/461-5154 (月~土 9:00~18:00)
NPO 法人パーキンソン病支援センター(090)3718-1564 (11:00~20:00)

共催 NPO 法人パーキンソン病支援センター、京都府難病相談・支援センター
協賛 京都市、京都市社会福祉協議会、京都市社会福祉協議会、京都新聞社会福祉事業団

■2006. 7. 9

「パーキンソン病のためのリハビリ教室」
鈴木俊明先生 (関西鍼灸大学助教授当時)

■2007. 2. 11

「パーキンソン病のためのリハビリ教室」
鈴木俊明先生 (関西鍼灸大学助教授当時)

■2007. 9. 23

「医療講演会」久野貞子先生 (国立精神・
神経センター武蔵病院副院長 当時)
島 史雄先生

(貝塚病院機能神経外科主任 当時)

■2007. 10. 21

「医療講演会」
中川正法先生
(京都府立医科大学教授当時)

■2008. 3. 16「医療講演会」

石川光紀先生 (石川医院 院長)

■2008. 10. 5「医療講演会」

秋山 智先生
(広島国際大学看護学部当時)

水田英二先生 (宇多野病院神経内科当時)

■2009. 11. 1「医療講演会」

久野貞子先生 (京都四条病院 パーキンソン
病・神経難病センター長 当時)
伊東秀文先生 (京都大学大学院医学研究科
脳病態生理学講座臨床神経学講師 当時)

■2010. 7. 11

「パーキンソン病に効く医療ヨガ」
橋本和哉先生
(はしもと内科外科クリニック 当時)

■2010. 9. 26

「パーキンソン病の鍼灸治療」
江川雅人先生
(明治国際医療大学准教授 当時)

■2011. 4. 3

「パーキンソン病のリハビリ勉強会」
鈴木俊明先生 (関西医療大学 教授)

大阪

2012年(平成24年)6月28日(木)

流館「京都」で開かれ
る。講師は、京大再生医
科学研究所、iPS細胞
研究所の高橋淳・准
教授の「写真、高橋准教
授の研究課題である



ES、iPS細胞を用いたパーキンソン病治療についての講演会が7月22日午後1時半~同3時半、京都市下京区の「ひと・まち交流館」に11年9月採択された。

ES細胞やiPS細胞を用いた移植治療に期待が寄せられている現在、講演では研究の現状と今後の展望を紹介する。

参加費1000円(患者の付き添い1人は無料)。定員230人。申し込み(7月14日

パーキンソン病

移植治療の現状紹介

京都・京大准教授が講演
来月22日

「パーキンソン病に対する幹細胞移植治療の実現化」は、厚生労働省と文部科学省が実施する「再生医療の実現化(ハイウェイ)プロジェクト」に11年9月採択された。

ES細胞やiPS細胞を用いた移植治療に期待が寄せられている現在、講演では研究の現状と今後の展望を紹介する。

毎日新聞(大阪)

2012.6.28

1・51163)かメール(npo-pdso.infr
o@pdso.ptu.jp)
で、問い合わせは、共
催の京都府難病相談・
支援センター(075
・461・51148
か、51154)、また
はNPO法人パーキン
ソン病支援センター
(090・3718・1
564)。「高橋淳」

■セミナー「第2回パーキンソン病の症例検討会」



京のNPOと府相談センターが症例検討会

難病(特定疾患)の一つで患者数が多いパーキンソン病について、NPO法人パーキンソン病支援センター(八幡市)と京都府難病相談・支援センター(京都市右京区)が共催で、在宅ケア症例検討会を始めた。介護支援専門員(ケアマネジャー)を対象に、症状への理解を深めてもらうため、今後も継続していく予定だ。(目下田貴政)

訪問看護活用など助言

パーキンソン病は安静時のふるえ(振戦)、関節のこわばり、動作緩慢、姿勢反射障害などの症状が出る。60歳前後の発症が多く、患者は人口10万人あたり100〜150人。京都府の特定疾患医療受給者証の所持者数を見ると、パーキンソン病関連疾患は3183人で、潰瘍性大腸炎に次いで2番目に多い(今年3月末現在)。

今後在宅ケアのケースが増えることを見越して、症例検討会は今年2月に初開催、2回目は7月中旬に下京区のと・まち交流館京都で開催され、18人が参加した。

「妻の介護をしている夫に病気の知識がなく苦労した」「動きが緩慢な妻に対し、夫が怠け者と罵声を浴びせるケースがあった」など、参加者が対応に困った事例を報告した。医師や看護師を交えて、対応方法を話し合った。

このほか、体が勝手に動く(スキネシア(不随意運動))が服薬後に起こりやすく、汗が多く出る▽食べ物のおいげが分かる

出し合って、分かりやすく説明してもらえた」といった感想が聞かれた。府難病相談・支援センター1長の水田英二・宇多野病院神経内科医長は「多職種で討論する場合は意外に少なく、自分の経験を通じた疑問をぶつけ合う会にしたい。患者が家でどのような暮らしをしているのか知る機会にもなる」と話した。

12月8日には専門医の講演会を開き、3回目の症例検討会は来年4月以降に予定する。

パーキンソン病支援センターの寺松由美子理事長は「母親を介護した経験から、介護や医療の専門家の力は大きいと感じた。参加したそれぞれが意見を述べて、力を付けてほしい」と期待している。

パーキンソン病 在宅ケア 対応法探る



「病気がこの先どうなっていくのか、在宅療養の伴走者として訪問看護を活用してほしい」と述べた。

参加者からは「今は起きていない症状に対する予測ができた」「症例を

パーキンソン病の特性を学んだ症例検討会(京都市下京区、ひとまち交流館京都)